

岡山芸術交流 2022

Okayama Art Summit 2022

実施計画

令和3年11月8日
岡山芸術交流実行委員会

目 次

1	開催趣旨	3
	(1) 趣旨	3
	(2) コンセプト	4
	(3) ロゴマーク	5
2	開催概要	7
	(1) 名称	7
	(2) 会期	7
	(3) 会場	7
	(4) 主催	7
	(5) 重点取組	10
3	現代アート展	11
	(1) 展覧会タイトル	11
	(2) ステイトメント	11
	(3) 参加アーティスト	12
	(4) 会場	38
4	パブリックプログラム	42
	(1) 方針	42
	(2) 目的	42
	(3) 取組概要	42
	(4) スケジュール	43
5	広報	44
	(1) 方針	44
	(2) 取組概要	44
	(3) 広報ツール	44
	(4) スケジュール	44
6	来場者対応	45
	(1) 方針	45
	(2) 取組概要	45
	(3) スケジュール	45
7	サポートスタッフ	46
	(1) 方針	46
	(2) 取組概要	46
	(3) スケジュール	46
8	連携・協賛	47
	(1) 方針	47

(2) 連携	47
(3) 協力・協賛	47
(4) スケジュール	48
9 鑑賞券、オフィシャルグッズ	49
(1) 方針	49
(2) 取組概要	49
(3) スケジュール	49
10 新型コロナウイルス感染症対策	50
(1) 方針	50
(2) 取組概要	50
(3) スケジュール	50
11 全体スケジュール	51

1 開催趣旨

(1) 趣旨

岡山市は災害の少なさ、温暖な気候や交通の利便性などから、多くの市民の方が「住み続けたい」と考えており、近年は大都市圏からの移住先として注目されています。一方で、都市の魅力の発信という点では、こうした環境面でのポテンシャルの高さを活かしてきていないという指摘がたびたびなされています。

さらに岡山市中心市街地においては、様々な施設の整備・開発が進んでいる岡山駅周辺エリアに対し、旧城下町エリアの賑わいの核としての地位が相対的に低下しており、その解決のため、中心市街地の回遊性の向上や街の魅力向上への努力を続けているところです。

旧城下町エリアは、戦国末期の岡山開府以来 400 有余年の歴史を誇る岡山のルーツともいえるべきエリアです。そこで培われてきた文化が岡山らしさを、岡山の魅力を生み出してきたことを考えると、このエリアの賑わい復活は、中心市街地活性化に止まらない、「岡山の顔」の再生に他ならないと考えます。

そこで、私たちが着目したのが、「芸術文化のもつ創造性」でした。2016 年、2019 年度と「岡山芸術交流」と銘打って、岡山城・後楽園周辺ゾーン内において、徒歩圏内の歴史・文化資源を活用した会場に最先端のコンセプチュアルアートを集結させ、街歩きを楽しみながら作品鑑賞ができるコンパクトな展示をコンセプトとした国際現代美術展を開催しました。

前回の岡山芸術交流 2019 においては、延べ 31 万 1 千人が来場し、先鋭的なアート作品やコンパクトな会場配置が来場者や国内外の専門家からも高く評価されたほか、県内小・中・高等学校等への鑑賞支援にも力を入れて取り組んだ結果、会期を通して 76 校・約 4,800 人の児童生徒が校外学習や部活動等で来場し、鑑賞を行うなど、次代を担う子どもたちへアートに積極的に触れる機会を提供することができました。

この取組を通じ、私たちはアートに秘められた国境・地域・性別・世代の違いを超えて人と人、街と人をつなぐ無色透明の接着剤としての力を強く感じています。アートを通じて、国内外から岡山の街に様々な人々が集い、交わり、絆を深めあう。アートが人々の想像力を刺激し、新たな未来を創り出そうとする力を育てていく。そして人と人、街と人との新たな出会い、思いがけない組み合わせが生み出す化学反応は、新しい価値の創造のみならず、私たちの街・岡山のよさの再認識にもつながっていく。アートの力が岡山の新たな未来、新たな魅力を創り出していく原動力になると確信しています。

また、新型コロナウイルス感染症により、日本をはじめ、世界中が大きな影響を受けています。岡山芸術交流 2022 の開催が、社会の再活性化に寄与するものと期待しています。

(2) コンセプト

○ 歩いて楽しむ

岡山城・後樂園周辺ゾーン内において、徒歩での回遊が可能な圏内に会場を複数配置したコンパクトな開催とする。

○ 資源を活かす

岡山城・後樂園・美術館・文化施設等、ゾーン内に立地する様々な歴史文化資源の特性を活かした展示を展開し、美術鑑賞と観光の融合を目指す。

○ 世界を見る

アーティスティックディレクターが示す方向性に基づき、岡山中で世界からも注目を集める最先端のコンセプチュアルアート作品を集結させた展覧会を目指す。

○ 人を育む

開催を支える人材、特に将来の地域文化の一翼を担う若手人材の育成を推進する。

(3) ロゴマーク



デザイン：ピーター・サヴィル Peter Savill

1955年、イギリス・マンチェスター生まれ。イギリスを代表するグラフィックデザイナーで、1970年代から80年代にかけて手がけた、マンチェスターのインディペンデント・レコード・レーベル「ファクトリー・レコーズ」のジャケットのデザイン（特にジョイ・ディヴィジョン、ニュー・オーダーなど）で広く知られる。その活動は音楽関連に止まらず、アドビシステムズ、CNN、ジバンシィなどイギリス国内外の有名企業のデザインも手がける。

アーティストとしても活動しており、「岡山芸術交流 2016」では、アナ・ブレスマン（Anna Blessmann：1969年ドイツ・ベルリン生まれ）とのアーティストユニットとして、旧後楽館天神校舎会場にて「触れる作品」（Touching Work）を展示、子どもたちを中心に人気の作品となった。

デザインコンセプト：

オーケー（いいね）、岡山。

オーケー（いいね）、岡山芸術交流。

今や世界の共通言語であるオーケー。いいね、を意味する、その2文字の形と音を「オカヤマ」の英語表記と音に重ねたのが今回のロゴデザインです。オーケーという記号が表す肯定の姿勢を、岡山と岡山芸術交流に反映させ、ロゴデザインを目にした人に岡山への興味、岡山芸術交流への賛同を促します。

デザインテクニク的にはOとKの文字の間の段差に「岡山芸術交流」の言葉が挿入可能であることが特徴です。これによりロゴデザインに本来あってはならない、ロゴと事業名の乖離という危険を防いでいるからです。色やサイズを含めた汎用性も最大限可能にした、いわゆ

る使い勝手のよいデザインであることも大きな利点といえるでしょう。

さらにこのデザインは、デザイナーであるピーター・サヴィルの個性、クールでシンプルなサヴィルらしさをあますところなく発揮しているのも注目点。サヴィル自身の世界的な知名度とあいまって、国際社会においても普遍的かつ認知度の高いロゴデザインとなるでしょう。

2 開催概要

(1) 名称

岡山芸術交流 2022（おかやま げいじゅつ こうりゅう にせんにじゅうに）
（英語表記） Okayama Art Summit 2022

(2) 会期

2022年9月30日（金）～ 同11月27日（日） 開館日は計51日間。
月曜は休館とする。ただし、祝日の場合（10月10日）は、その翌日火曜日を休館とする。

(3) 会場

岡山城・後楽園周辺の歴史・文化ゾーン内において徒歩で移動が可能なコンパクトなエリアに会場を配置する。主要会場は、旧内山下小学校、岡山県天神山文化プラザ、岡山市立オリエント美術館、林原美術館などに加え、石山公園、岡山城などの屋外展示を検討する。（次ページ図）

(4) 主催

岡山芸術交流実行委員会

会 長 大森雅夫（岡山市長）

副会長 横田有次（岡山県副知事）

〃 松田 久（岡山商工会議所会頭）

監 事 井上信二（井上公認会計士事務所）

総合プロデューサー 石川康晴（公益財団法人石川文化振興財団理事長）

総合ディレクター 那須太郎（TARO NASU 代表/ギャラリスト）

アーティストックディレクター リクリット・ティラヴァーニヤ（アーティスト）

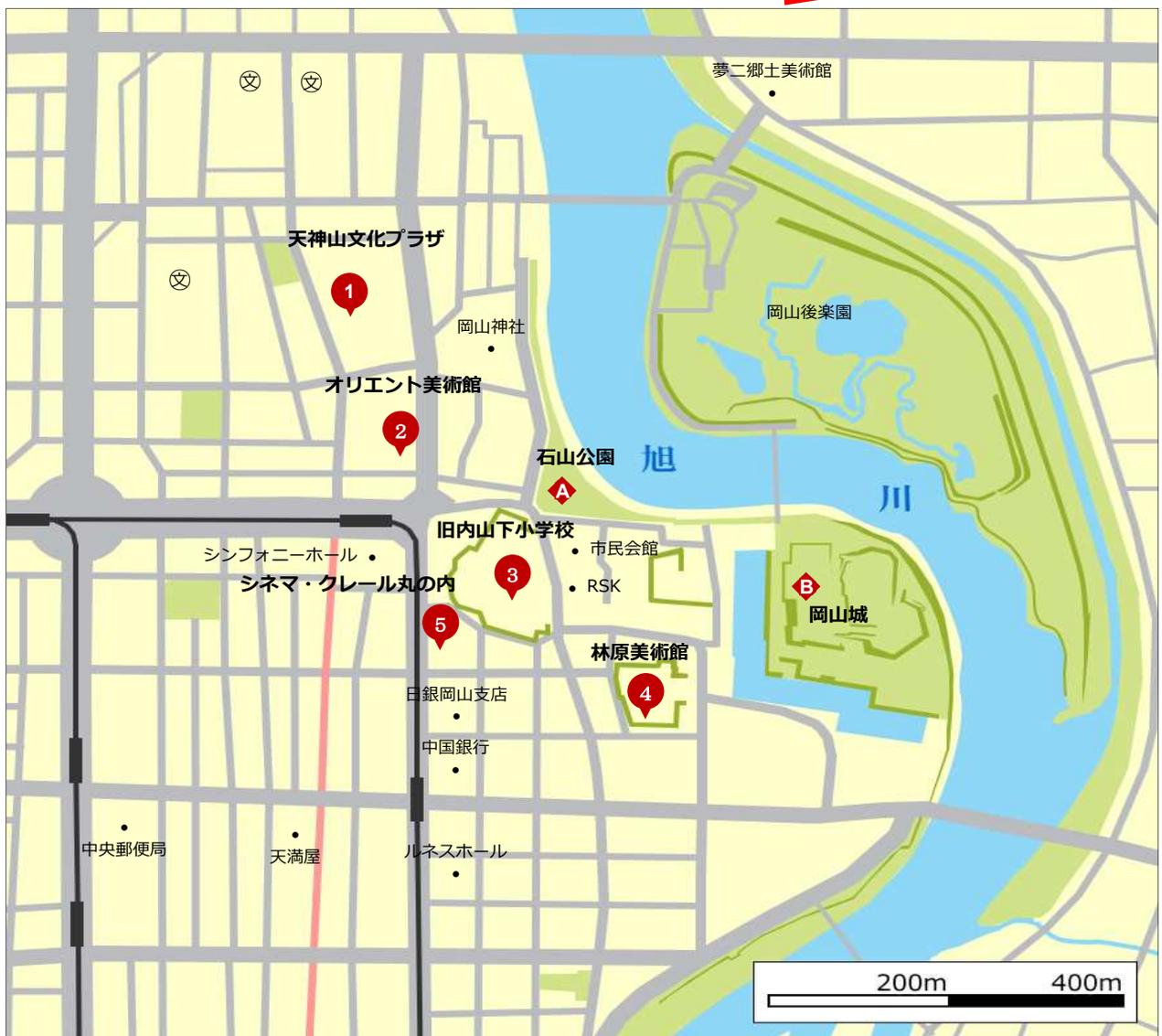
パブリックプログラムディレクター 木ノ下智恵子（大阪大学 21 世紀懐徳堂准教授）

顧 問 和氣 健（岡山市議会議長）

〃 槇野博文（国立大学法人岡山大学学長）

〃 宮長雅人（株式会社中国銀行取締役会長）

構成団体 岡山市・岡山市教育委員会／岡山県／岡山商工会議所／(公益) おかやま観光コンベンション協会／岡山カルチャーゾーン連絡協議会／大学コンソーシアム岡山／(株) 山陽新聞社／(株) RSK 山陽放送／(株) 岡山放送／テレビせとうち(株)／(公益) 岡山県バス協会／(一般) 岡山県タクシー協会／(株) 西日本旅客鉄道／井上公認会計士事務所／(株) 中国銀行／(公益) 岡山文化芸術創造／(公益) 石川文化振興財団



※会場候補地：数字は屋内展示、アルファベットは屋外展示。

[アーティストディレクター]

リクリット・ティラヴァーニャ Rirkrit Tiravanija

1961 年、アルゼンチン生まれ。現在はニューヨーク、ベルリン、チェンマイを拠点に製作、活動。近年の主な展覧会に 2020 年「Fear Eats the Soul」(グレンストーン美術館、ポトマック)、2019 年「Rirkrit Tiravanija : Who is afraid of red yellow and green」(ハーシュホーン美術館、ワシントン D.C.)、2018 年「untitled 2018 (the infinite dimensions of smallness)」(Ng Teng Fong Roof Garden Commission、ナショナル・ギャラリー、シンガポール)など。国内では 2018 年「Do We Dream Under the Same Sky - (僕らは同じ空の下で夢を見るのだろうか)」(カオス表参道、東京)、2016 年「岡山芸術交流 2016 - Development」(岡山城天守閣前広場、岡山)、2015 年「誰が世界を翻訳するのか」(金沢 21 世紀美術館、金沢)など、多数。



Photo by Pauline Assathinay

(5) 重点取組

取組内容

○ 地域への浸透

市民・県民、産業界、教育機関、文化団体など様々な主体の参画を促し、地域に根付いた国際現代美術展として一層の浸透を図る。

○ 学校鑑賞の強化

未来を担う子どもたちに積極的に鑑賞の機会を設けるため、県内小学校・中学校・特別支援学校に対する鑑賞の支援を強化する。併せて高等学校や創造系の専門学校、大学への鑑賞の働き掛けも積極的に行う。

○ 運営を支える人材の育成

「岡山芸術交流」の運営を支える人材の育成を強化する。特に地元企業に加え、市民・県民、学生の参加を増やすとともに、岡山芸術交流の運営に係る内容のほか、独自イベントの実施、まちづくり・観光など幅広い分野の研修を行うなど活動内容の充実を図る。

○ ターゲットを見据えた積極的な情報発信

国内外への発信を継続して推進し、国際現代美術展としての「岡山芸術交流」の浸透・確立に努めるとともに、開催地・岡山の魅力発信も併せて展開し、海外からの誘客に結び付ける。

目標

○ 来場者の満足度

来場者アンケートの「次回も訪れたい」の割合
(2019年実績) 81.8% → (2022年目標) 85%

○ 子どもたちが現代アートにふれる

2年間の教育機関での取組や本展来場により現代アートにふれた児童生徒数
(2021～2022年目標) 10,000人

※参考 2019年に来場した児童生徒数延べ約4,800人

3 現代アート展

(1) 展覧会タイトル

Do we dream under the same sky
僕らは同じ空のもと夢をみているのだろうか

(2) ステイトメント

疑問文としてすべての要素を備えていながらも文末に疑問符のないこのセンテンスは、アイディアの入り口にしかすぎません。

この数年間、世界的パンデミックに加え、アメリカ国内の白人至上主義や世界各地のナショナリスト的ポピュリストの趨勢が強まってきたという背景を踏まえて、私はこの展覧会を私たちの意識や視点を変革するものにしたいと考えています。

こうしたさまざまな思いを巡らし、次回の岡山芸術交流 2022 についてはできれば、旅人という共通の背景を持つアーティストの周縁的な活動に特に集中したいと考えています。旅人、というのは、選定されたアーティストのほとんどが異質な文化的あるいは社会的背景を持っているという意味です。彼らの多くが、活動や制作拠点を西洋の芸術的ヘゲモニーの中心に置きながらも、その（西洋的）ヘゲモニーの中での自らの位置づけにおいては、西洋以外の立場からのアイデンティティが根底にあります。彼らの人生と歴史は、西洋との違いによって形作られているのです。

ここでいう夢は、違いのある空や、多元性のある空で見る夢、つまり、西洋的規範の周縁にある物語表現の中で見る夢を意味しています。私たち（参加者と鑑賞者）からすると自らが規範的とみなす世界の外にある表現を経験するということです。言い換えると、物語や人生、そして考え方、見方、聞き方、あり方、さらには希望、野心、そして日常の中で心を動かされるような夢を超えた存在の仕方に対して、私たちの目を開かせてくれる夢を意味しています。

アーティストックディレクター
リクリット・ティラヴァーニヤ

(3) 参加アーティスト

上松祐司 | Yuji Agematsu (1956 年、日本)

1956 年、神奈川県生まれ。現在はニューヨークのブルックリンにて活動。

主な個展として、ミゲル・アブレウ・ギャラリー、ニューヨーク (2017、2019、2020)、現代アートセンター、ビリニュス (2019)、ルル、メキシコシティ (2019)、The Power Station、ダラス (2018)、Artspeak、バンクーバー (2014)、Real Fine Arts、ブルックリン (2012&2014)、アンソロジー・フィルム・アーカイブス、ニューヨーク (2004)、TZ' Art&Co.、ニューヨーク (1994) などが挙げられる。また、エール・ユニオン、オレゴン州ポートランド (2014)、57th Carnegie International、ピッツバーグ (2018)、Speak Lokal、チューリッヒ (2017)、「Serialities」、ニューヨーク (2017)、「The Keeper」、ニューミュージアム、ニューヨーク (2016) がある。パフォーマンスには、スイス・インスティテュート、ニューヨーク (2018)、アーティスト・スペース、ニューヨーク、(2017)、ホイットニー美術館、ニューヨーク (2016) などの機関でのグループ展に参加している。

Born in 1956, Kanagawa, Japan. Currently lives and works in Brooklyn, NY.

He has had solo exhibitions at Miguel Abreu Gallery, New York (2017, 2019 & 2020); Contemporary Art Centre, Vilnius (2019); Lulu, Mexico City (2019); the Power Station, Dallas (2018); Artspeak, Vancouver (2014); Real Fine Arts, Brooklyn (2012 & 2014); Anthology Film Archives, New York (2004); and TZ' Art & Co., New York (1994). Group exhibitions include, Yale Union, Portland, OR (2014); 57th Carnegie International, Pittsburgh (2018); Speak Lokal, Kunsthalle Zurich (2017); *Serialities*, New York (2017); *The Keeper*, New Museum, New York (2016). His performances have taken place at the Swiss Institute, New York (2018); Artists Space, New York, (2017); Whitney Museum of American Art, New York (2016).



zip: 04.01.03. . . 04.30.03, 2003

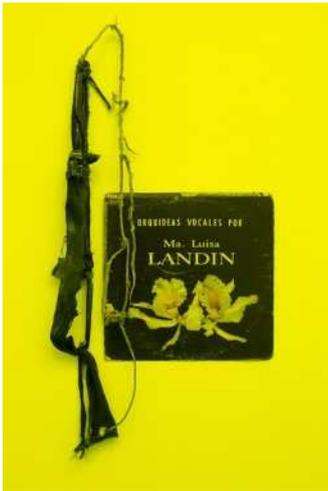
mixed media in cigarette pack cellophane wrappers (30 units)

on wood backed acrylic shelf, latex paint

wrappers, each approx. : 2 1/2 x 2 1/8 x 1 inches (6.3 x 5.3 x 2.5 cm)

shelving unit: 26 1/2 x 34 1/4 x 5 1/4 inches (67.3 x 87 x 13.3 cm)

COURTESY OF MIGUEL ABREU GALLERY. COPYRIGHT © THE ARTIST.



2019. 04. 03, AM 11:34 ~ PM 12:34, onl. López Rayonbetween Guerrero & Tepito, 2019

LP record, plastic string and cloth

two parts: 12 1/4 x 12 1/4 inches (31.1 x 31.1 cm) & 32 1/4 x 6 5/8 inches (81.9 x 16.8 cm)

COURTESY OF MIGUEL ABREU GALLERY. COPYRIGHT © THE ARTIST.

ラゼル・アハメド | Raseel Ahmed (生年非公開、アメリカ)

現在コロンバス、オハイオにて活動。

主な展覧会には、MFA オンラインエキシビション (2020)、USAID、ワシントン DC、アメリカ (2018)、南アジアクィア映画祭、ストックホルム、スウェーデン (2018)、DC センター、ワシントン DC、アメリカ (2017)、ブリティッシュ・カウンシル、ダッカ、バングラデシュ (2015)、ダイアログ国際映画祭、カルカッタ、インド (2014) などが挙げられる。

Works in Columbus, Ohio.

His major exhibitions include MFA online exhibition (2020), USAID, Washington DC, USA (2018), South Asian Queer Film Festival, Stockholm, Sweden (2018), DC Center Washington DC, USA (2017), British Council, Dhaka, Bangladesh (2015), Dialogue international film festival, Kolkata, India (2014).



Video Still

Credit: Rasel Ahmed



Film Poster

Credit: Tan

荒川医 | Ei Arakawa (1977 年、日本)

1977 年、福島生まれ。現在はロサンゼルスにて活動している。

過去の参加展覧会に、テートモダン、ロンドン (2021)、ホノルル・ビエンナーレ (2019)、リバプール・ビエンナーレ (2018)、ミュンスター彫刻プロジェクト (2017)、アムステルダム市立美術館 (2017)、ルートヴィヒ美術館、ケルン、ドイツ (2017)、第 9 回ベルリンビエンナーレ、ドイツ (2016)、ブランドホルスト博物館、ミュンヘン、ドイツ (2015)、光州ビエンナーレ、韓国 (2014)、ポーランド、ワルシャワ近代美術館 (2014)、ホイットニービエンナーレ、ニューヨーク (2014)、カーネギー・インターナショナル、ピッツバーグ、米国 (2013)、森アーツセンター、東京 (2013)、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク (2013)、ニューヨーク近代美術館 (2013)、第 55 回ヴェネツィアビエンナーレ、イタリア (2013)、第 30 回サンパウロビエンナーレ、ブラジル (2012)、Le Printemps de Septembre、トゥールーズ、フランス (2011)、横浜トリエンナーレ (2008)、パフォーマー、ニューヨーク (2007)、越後妻有トリエンナーレ (2006) 等がある。

Born in 1977, Fukushima, Japan. Lives and works in Los Angeles, USA.

Previously in: Tate Modern, London (2021); Honolulu Biennial (2019); Liverpool Biennial (2018); Sculpture Project Münster (2017); Stedelijk Museum, Amsterdam (2017); Museum Ludwig, Cologne, Germany (2017); The 9th Berlin Biennale, Germany (2016); Museum Brandhorst, Munich, Germany (2015); Gwangju Biennial, South Korea (2014); The Museum of Modern Art, Warsaw, Poland (2014); Whitney Biennial, New York (2014); Carnegie International, Pittsburgh, USA (2013); Mori Art Museum, Tokyo (2013); Guggenheim Museum, New York (2013); The Museum of Modern Art, New York (2013); the 55th Venice Biennial, Italy (2013); 30th São Paulo Biennial, Brazil (2012); Le Printemps de Septembre, Toulouse, France (2011); Yokohama Triennial (2008), Performa, New York (2007); Echigo-Tsumari Triennial (2006).



Ei Arakawa

Mega Please Draw Freely

2021

Turbine Hall at Tate Modern, London

Installation and performance view

Photo: Catherine Wood



Ei Arakawa

WEWORK BABIES

2019

Artists Space, New York

Performance view

Photo: Paula Court

アート・レーバー・コレクティブ | Art labor Collective

サオ・グエン・ファン (Thao Nguyen Phan)、トルーオン・コング・トゥン (Truong Cong Tung)、アレ・クィナン・タン (Arlette Quynh-Anh Tran) で構成されるコレクティブで、ホーチミン市を拠点とする。

主な展覧会としては、現代美術トリエンナーレ、ベルギー (2021)、第 57 回カーネギーインターナショナル (2018)、バンコクアートビエンナーレ (2018)、ダッカアートサミット、バンガラデッシュ (2018)、「寄生虫と現代美術」、ワルシャワ (2018)、ポンピドゥーセンター、パリ (2017)。アジアンアートビエンナーレ、台湾 (2017)、KF ギャラリー、韓国 (2017)、Jrai Dew Sculpture Garden、ベトナム (2016-17)、「The Adventure of Color Wheel」、HCMC 眼科病院の小児科 (2015)、サンアート、ホーチミン (2014) などが挙げられる。

Including Thao Nguyen Phan, Truong Cong Tung & Arlette Quynh-Anh Tran is an artist collective based in Ho Chi Minh City,

They have been exhibited widely in Vietnam and international, notably such as Paradise Kortrijk, Triennial for contemporary art, Belgium (2021); Carnegie International 57th, Bangkok Art Biennale, 'A beast, a god, and a line' at Dhaka Art Summit, Para Site and Modern Art in Warsaw (2018); Cosmopolis #1: Collective Intelligence at Centre Pompidou, Paris; Asian Art Biennial, Taiwan; 'Salt of the Jungle' at KF Gallery, Korea, (2017); Jrai Dew Sculpture Garden in Central Highlands of Vietnam (2016-17); The Adventure of Color Wheel at Pediatrics Department, Eye Hospital HCMC (2015); Unconditional Belief at Sàn Art, Ho Chi Minh City (2014).



Installation view at Jrai Dew exhibition no. 02 at Blut Grieng village

Artists: Rcham Jeh, Kpuih Gloh, Puih Hăn, Siu Lon, Romah Hyet, Rahlan Loh



Jrai Dew exhibition no. 03

A special performance by Teh Dar and À Ó circus

Wang Bing | 王兵 / ワン・ビン (1967年、中国)

1967年、中国陝西省西安生まれ。フランスと中国にて活動。

王兵の主な個展には、LE BAL、パリ (2021)、クンストハレ・チューリッヒ、チューリッヒ (2018-2019)、CCA Wattis Institute、サンフランシスコ (2016)、ポンピドゥセンター国立近代美術、パリ (2014)、Museo Reina Sofia and Fimoteca Espanola、マドリード (2018) など各国著名美術館での大規模展がある。また、Marta Herford gGmbH、ヘルフォルト (2021)、Textile Museum、ワシントン D.C. (2020)、ボードイン大学美術館、ブランズウィック (2019)、Biennale of Urbanism Architecture、シェンチェン (2017)、Brunswick Centre Culturel de Strombeek、ブリュッセル (2017)、チョンジュ国際映画祭、チョンジュ (2015)、上海ビエンナーレ、上海、(2014)、ミラノ国際映画祭、ミラノ (2010) などの機関でのグループ展に参加している。

Born in 1967, Xi'an, Shaanxi Province, China. Lives and works in France and China.

Wang Bing notable solo exhibitions include LE BAL, Paris (2021); Kunsthalle Zürich (2018-2019); CCA Wattis Institute, San Francisco (2016); Musée National d'Art Moderne, Centre Georges Pompidou, Paris (2014). In 2018, the Museo Reina Sofia and Fimoteca Espanola, Madrid have shown his work for a major survey exhibition.

Group exhibitions include the Marta Herford gGmbH (2021); Textile Museum, Washington D.C. (2020); Bowdoin College Museum of Art (2019); Biennale of Urbanism Architecture, Shenzhen (2017); Brunswick Centre Culturel de Strombeek, Brussels (2017); Jeonju International Film Festival (2015); Shanghai Biennale (2014); Milano Filmmaker Film Festival (2010).



Wang Bing

Fengming, chronique d'une femme chinoise, 2009

Film 16/9 HD transferred to DVD, colour, sound 3h47min

Edition of 6 + 2 AP

Courtesy of the artist and Galerie Chantal Crousel, Paris



Wang Bing *15 Hours*, 2017

16:9 film, colour, sound - in two parts (7h55min each) 15h50min

Edition of 6 + 2 AP

Courtesy of the artist and Galerie Chantal Crousel, Paris

ダニエル・ボイド | Daniel Boyd (1982 年、オーストラリア)

1982 年、ケアンズ生まれ。現在はシドニーで活動中。

ボイドは、オクウィ・エンヴェゾーがキュレーションした第 56 回ヴェネツィアビエンナーレ、ヴェネツィア (2015)、ハンス・ウルリッヒ・オブリストとアサド・ラザによってキュレーションされた「モンディアリテ」ボゴシアン財団、ブリュッセル (2017)、デビッド・エリオットによってキュレーションされた「A Time for Dreams」モスクワ国際ヤング・アーツ・ビエンナーレ、モスクワ (2014)。第 7 回アジア太平洋現代美術トリエンナーレ、クイーンズ・ランドアート・ギャラリー | 現代美術ギャラリー (2012)、Jitish Kallat によってキュレーションされたコチムジリス・ビエンナーレ、コチ、インド (2014)、ブレンダ・L・クロフトがキュレーションした「カルチャーウォリアー」ナショナル・インディジニアス・アート・トリエンナーレ、オーストラリア国立美術館、キャンベラ (2007) などの主要なビエンナーレや展示会に参加した。

Born in 1982, Cairns, Australia. Lives and works in Sydney, New South Wales.

Boyd's practice has led him to participate in major biennales and exhibitions including All the World's Futures, 56th Venice Biennale, Venice (2015) curated by Okwui Enwezor; Mondialité (2017) curated by Hans Ulrich Obrist and Asad Raza at the Boghossian Foundation, Villa Empain, Brussels (2017); A Time for Dreams, Moscow International Biennale for Young Arts, Moscow curated by David Elliot (2014); The 7th Asia Pacific Triennial of Contemporary Art, Queensland Art Gallery | Gallery of Modern Art (2012); Kochi-Muziris Biennale: Whorled Explorations, Kochi, India (2014) curated by Jitish Kallat; and Culture Warriors: National Indigenous Art Triennial, National Gallery of Australia, Canberra (2007) curated by Brenda L Croft.



Untitled (PI3), 2013

oil and archival glue on linen

214 x 300 cm

Courtesy of the Artist and Roslyn Oxley9 Gallery, Sydney



Daniel Boyd + Edition Office, For Our Country, 2019. Aboriginal and Torres Strait Islander Memorial, Australian War Memorial. Photo: Ben Hosking, courtesy of the artist and Kukje Gallery, Seoul/Busan, Roslyn Oxley9, Sydney, STATION, Melbourne and Superblue

イ・ブル（李咄） | Lee Bul (1964年、韓国)

1964年、韓国生まれ。現在も韓国にて活動。

サンクトペテルブルクのマネゲ中央展示ホール（2020）を始め、グロピウス・バウ、ベルリン（2018-2019）、ハイワード・ギャラリー（2018）、国立現代美術館、ソウル（2014）、MUDAM -Muséed' Art Moderne Grand-Duc Jean、ルクセンブルグ（2013）、森美術館、東京（2012）、カルティエ財団、パリ（2007）、シドニー現代美術館（2004）、The Power Plant、トロント（2003）、MAC、Galeries Contemporaines des Musées de Marseille（2002）、ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート、ニューヨーク（2002）、ル・コンソーシアム、ディジョン（2002）、ファブリック・ワークショップ・アンド・ミュージアム、フィラデルフィア（2001）、Kunsthalle Bern、ベルン（1999）、近代美術館、ニューヨーク（1997）など、世界中の主要な美術館や機関での展覧会を多数開催。

Born in 1964, Korea where she lives and works.

Lee Bul's work has been featured in solo exhibitions at major museums and institutions throughout the world, including Manege Central Exhibition Hall, St Petersburg (2020); Gropius Bau, Berlin (2018-2019); Hayward Gallery (2018); National Museum of Modern and Contemporary Art, Seoul (2014); MUDAM - Musée d'Art Moderne Grand-Duc Jean, Luxembourg (2013); Mori Art Museum, Tokyo (2012); Fondation Cartier, Paris (2007); Museum of Contemporary Art, Sydney (2004); The Power Plant, Toronto (2003); MAC, Galeries Contemporaines des Musées de Marseille (2002); New Museum of Contemporary Art, New York (2002); Le Consortium, Dijon (2002); Fabric Workshop and Museum, Philadelphia (2001); Kunsthalle Bern (1999); and the Museum of Modern Art, New York (1997).



Willing To Be Vulnerable, 2015-16. Heavy-duty fabric, metalized film, transparent film, polyurethane ink, fog machine, LED lighting, electronic wiring, dimensions variable. Installation view of the 20th Biennale of Sydney, 2016.

Photo: Algirdas Bakas. Courtesy: The artist.



View of the exhibition *Lee Bul: Crashing*, Hayward Gallery, London, 2018. © Lee Bul. Photo: Mark Blower. Courtesy: Hayward Gallery, London

リジア・クラーク | Lygia Clark (1920-1988 年、ブラジル)

1920 年、ブラジルのベロオリゾンテに生まれ、1988 年、ブラジルのリオデジャネイロにて生涯を終える。

主な個展にはビルバオ・グッゲンハイム美術館、スペイン (2020)、テート・モダン、ロンドン、イギリス (2020)、アリソン・ジャック・ギャラリー、ロンドン、イギリス (2016)、MoMA、ニューヨーク、アメリカ (2014)、ヘンリー・ムーア・インスティテュート、リーズ、イギリス (2014) および Itaú Cultural、サンパウロ、ブラジル (2012) などが挙げられる。また、ポンピドゥーセンター、パリ、フランス (2021)、MASP、サンパウロ、ブラジル (2019)、MoMA、ニューヨーク、米国 (2019)、ZKM、カールスルーエ、ドイツ (2019)、Haus der Kulturen der Welt、ベルリン、ドイツ (2019)、ガレージ現代美術館、モスクワ、ロシア (2018)、MAMBA、ブエノスアイレス、アルゼンチン (2018)、ブルックリン美術館、ニューヨーク、米国 (2018)、現代美術館、ワルシャワ、ポーランド (2017) などの機関でのグループ展に参加している。

Born 1920 in Belo Horizonte, Brazil. Died 1988 in Rio de Janeiro, Brazil.

Clark has had solo exhibitions at Guggenheim Bilbao, Spain (2020); Tate Modern, London, UK (with He·lio Oiticica, 2020); Alison Jacques Gallery, London, UK (2016); MoMA, New York, US (2014); Henry Moore Institute, Leeds, UK (2014); and Itau· Cultural, Sa·o Paulo, Brazil (2012). Her work has been included in recent group shows at Centre Pompidou, Paris, France (2021); MASP, Sa·o Paulo, Brazil (2019); MoMA, New York, US (2019); ZKM, Karlsruhe, Germany (2019); Haus der Kulturen der Welt, Berlin, Germany (2019); Garage Museum of Contemporary Art, Moscow, Russia (2018); MAMBA, Buenos Aires, Argentina (2018); Brooklyn Museum, New York, US (2018); and Museum of Modern Art, Warsaw, Poland (2017).

アブラハム・クルズヴィエイガス | Abraham Cruzvillegas (1968 年、メキシコ)

1968 年、メキシコシティ生まれ。現在もメキシコシティで活動。

主な近年の個展には、ギャラリー Chantal Crousel、パリ、フランス (2021)、ラ・メゾン・ランデヴー、ブリュッセル、ベルギー (2020)、バス美術館、マイアミビーチ、アメリカ (2020)、アスペン美術館、アメリカ (2019)、銀座メゾンエルメス・フォーラム (2017)、アートソングェセンター、ソウル、韓国 (2015) などが挙げられる。また、ウェクスナー芸術センター、コロンバス、アメリカ (2021)、レイクサイド・アートセンター、ノッティンガム、イギリス (2019)、第 14 回チリ・メディア・アート・ビエンナーレ、サンチアゴ、チリ (2019) などの機関でのグループ展に参加している。

Born in 1968, Mexico City, Mexico where they lives and works.

His major solo exhibitions include Galerie Chantal Crousel, Paris (2021), La Maison Rendez-Vous, Brussels (2020), The Bass Museum of Art, Miami Beach (2020), Aspen Art Museum,

United States (2019), Ginza Maison Hermès Le Forum, Tokyo (2017), Sinbyeong, Art Sonje Center, Seoul (2015). Group exhibitions include Wexner Center for the Arts, Columbus, United States (2021), Lakeside Arts Center, Nottingham, United Kingdom (2019), 14th Bienal de Artes Mediales de Santiago (2019).



Installation view, Abraham Cruzvillegas: Hi, how are you, Gonzo?, The Contemporary Austin - Jones Center on Congress Avenue, Austin, Texas, 2019. Artwork © Abraham Cruzvillegas. Courtesy the artist and kurimanzutto, Mexico City and New York. Image courtesy The Contemporary Austin. Photograph by Colin Doyle.



Installation view, Abraham Cruzvillegas: Hi, how are you, Gonzo?, The Contemporary Austin - Jones Center on Congress Avenue, Austin, Texas, 2019. Artwork © Abraham Cruzvillegas. Courtesy the artist and kurimanzutto, Mexico City and New York. Image courtesy The Contemporary Austin. Photograph by Brian Fitzsimmons.

池田亮司 | Ryoji Ikeda (1966年、日本)

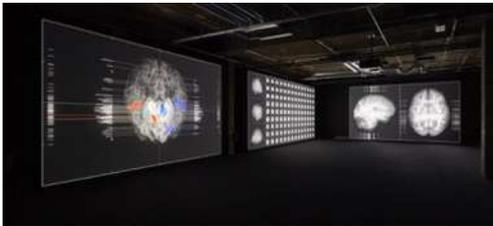
1966年、岐阜生まれ。現在はパリと京都にて活動。

近年の主な個展には、池田亮司展(2019)、台北市立美術館、台北(2019)、「Ryoji Ikeda | continuum」、ポンピドゥーセンター、パリ(2018)、「supersymmetry」、クム美術館、タリン(2016)「micro | macro」、ZKM、カールスルーエ(2015)、supersymmetry、山口情報芸術センター、山口(2014)、+/- [the infinite between 0 and 1、東京都現代美術館(2009)があり、国際展覧会には、第58回ヴェネツィアビエンナーレ、ヴェネツィア(2019) Wiener Festwochen 2018、ウィーンフェスティバル、ウ

ーン (2018)、堂島リバービエンナーレ、堂島リバーフォーラム、大阪 (2015)、あいちトリエンナーレ、愛知 (2010) などがある。

Born in 1966 in Gifu, Japan. Lives and works in Paris, France and Kyoto, Japan

Recent solo exhibitions include *Ryoji Ikeda Solo Exhibition*, Taipei Fine Arts Museum, Taipei (2019); *Ryoji Ikeda / continuum*, Centre Pompidou, Paris (2018); *supersymmetry*, KUMU Art Museum, Tallinn (2016); *micro / macro*, ZKM, Karlsruhe (2015); *supersymmetry*, Yamaguchi Center for Arts and Media, Yamaguchi (2014); *+/- [the infinite between 0 and 1]*, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo (2009); and international exhibitions include 58thVenice Biennale, Venice (2019); Wiener Festwochen 2018, Vienna Festival, Vienna (2018); Dojima River Biennale, Dojima River Forum, Osaka (2015); Aichi Triennale, Aichi (2010).



The photo credit is: Jack Hems, 180 The Strand, 2021.

©Ryoji Ikeda, courtesy of TARO NASU.

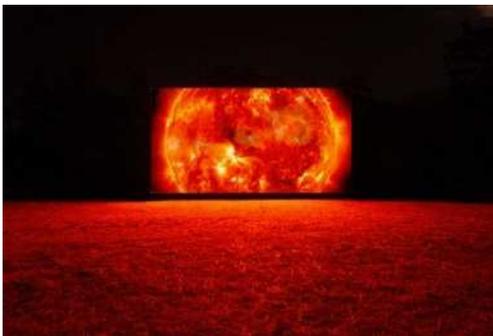


Photo credits:

Ryoji Ikeda

data-verse 1 (2019)

© Ryoji Ikeda Studio/ ALTERNATIVE KYOTO 2020 Artspace of the Light

—

Work credits:

Ryoji Ikeda, *data-verse 1* (2019)

DCI-4K DLP projector, computer, speakers

dimensions variable

concept, composition: Ryoji Ikeda

computer graphics, programming: Norimichi Hirakawa, Tomonaga Tokuyama, Satoshi Hama, Ryo Shiraki

commissioned by Audemars Piguet

with special thanks to The Vinyl Factory

円空 | ENKU (1632-1695 年、日本)

円空は江戸時代初期の僧。1632年に美濃国（現・岐阜県）に生まれる。東海をはじめ、近畿、関東、東北、北海道など諸国を行脚しながら、旅先で仏像を制作。生涯で12万體もの仏像をつくることを発願したと伝えられ、廃仏毀釈や戦争を経てもなお、5000体以上が現存。晩年には飛騨高山に滞在し、63歳で没するまで仏像を彫り続けた。「円空仏」と呼ばれるその木像の最大の特徴は、素朴で荒々しい造形。ナタやノミで勢いよくかたちを彫り出し、装飾や色彩、漆塗を施すことなく、木そのものの素材感をむき出しにしている表現によって、ほかに類を見ない独自のスタイルを確立している。同時期のほかの仏像と比べて、表情が豊かに見えるところも魅力のひとつ。その背景にある思想には密教信仰や山岳修験との接点も見られるが、のちに仏像を彫る際の決まりごとから自由に逸脱し、自然信仰や神仏習合の影響が見られるようになる。岐阜県、愛知県の寺社を中心にその作品を見ることができる。

参照 <https://bijutsutecho.com/artists/119>

Enkū (円空) (1632-1695) was a Japanese Buddhist monk, poet and sculptor during the early Edo period. He was born in Mino Province (present-day Gifu Prefecture) and started to carve statues at his age of 32. Known for carving some 120,000 wooden statues of the Buddha and other Buddhist icons, many of which were given in payment for lodging on his pilgrimages to temples throughout Japan. After the abolish Buddhism under the anti-Buddhist movement at the beginning of Meiji era and the World War II, it is said that more than 5,000 statues by ENKU still exist. The most definitive feature of the wooden statues is its simple and rough shape, carving out the shape roughly, vigorously and freely mostly from one piece of scrap wood. Not applying any decoration, color or lacquer, the expression that exposes the texture of wood itself establishes a unique style. Compared to other Buddha statues of the same period, ENKU's statues have richer expression on their faces.

片山真理 | Mari Katayama (1987年、日本)

1987年群馬県出身。

主な参加展覧会に 2019年「第58回ヴェネチア・ビエンナーレ」(ヴェネチア、イタリア)、「Broken Heart」(White Rainbow, ロンドン, イギリス)、2017年「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol. 14」(東京都写真美術館、東京、日本)、「帰途-on the way home-」(群馬県立近代美術館、群馬、日本)、2016年「六本木クロッシング 2016 展：僕の身体、あなたの声」(森美術館、東京、日本)、2013年「あいちトリエンナーレ 2013」(納屋橋会場、愛知、日本)などが挙げられる。主な出版物に2019年「GIFT」United Vagabondsがある。2019年第35回写真の町東川賞新人作家賞、2020年第45回木村伊兵衛写真賞を受賞。

Born in 1987, Gunma, Japan.

Major exhibitions include 58th Venezia Biennale, Venezia, Italy (2019); White Rainbow, London, UK (2019); Tokyo Metropolitan Museum of Photography, Tokyo, Japan (2017); Gunma Prefectural Museum of Modern Art, Gunma, Japan (2017); Mori Arts Center, Japan (2016); Aichi Triennale 2013, Aichi, Japan (2013) etc. Main publication is the "GIFT" United Vagabonds (2019). Received the 35th Higashikawa Award for New Artists (2019); and the 45th Kimura Ihei Photo Award (2020).



©Mari Katayama courtesy of Akio Nagasawa Gallery

ミー・リン・ル | My-Linh Le (生年非公開、アメリカ)

バイエリア(カリフォルニア)を拠点とする第2世代のベトナム系アメリカ人ダンサーであり、受賞歴のある振付家、学際的な物語作家、元環境弁護士でもある。

主な作品に「THE ORIGIN STORY OF NO NAME」、サンフランシスコ、アメリカ(2021)、「UNTITLED」、サンフランシスコ、アメリカ(2021-2022)、「MUD WATER」、オークランド、アメリカ(2019-2021)、

「TRONG NUOC」、テンピ、アメリカ (2019–2020)、「THE REVERSE TURING TEST」、チェンマイ、タイ (2017–2018) などが挙げられる。

My-Linh Le is a Bay Area (California) –based, second generation Vietnamese American dancer, award winning choreographer, multidisciplinary storyteller, and former environmental attorney.

Her major works include *THE ORIGINE STORY OF NO NAME*, San Francisco, USA (2021), *UNTITLED*, San Francisco, USA (2021–2022), *MUD WATER*, Oakland, USA (2019–2021), *TRONG NUOC*, Tempe, USA (2019–2020), *THE REVERSE TURING TEST*, Chiang Mai Thailand (2017–2018).

デヴィッド・メダラ | David Medalla (1942–2020 年、フィリピン)

1942 年、マニラ、フィリピン生まれ。2020 年に没。

フィリピンを代表するコンセプチュアル・アーティストで、Institute of Contemporary Arts、ロンドン (2005)、Weiss auf Weiss (1966)、Bern Kunsthalle (1969)、ドクメンタ 5、カッセル (1972) などにて個展を多数開催。

また、「How Art Became Active: 1960 to Now」Tate Modern (2016)、「Other Primary Structures」The Jewish Museum、ニューヨーク (2014)、「Art Turning Left: How Values Changed Making 1789–2013」テート・リバプール (2013–14)、Thresholds、TRAF0、シュチェチン (2013)、「態度が形になるとき」ベルン 1969 / ベニス 2013、プラダ財団、ベニス (2013)、「Uneexpositionparlée」ジュ・ド・ポーム、パリ、フランス (2013)、「Migrations」テートブリテン、ロンドン (2012)、「A la vie de libe re e」Une histoire de la performance sur la Coˆte d’Azur de 1951 a 2011、ヴィラルソン、ニース、フランス (2012) など、国際的な展覧会に参加した。

Born in 1942, Manila, Philippine. Died in 2020.

Medalla’s work was the subject of the solo exhibition at the Institute of Contemporary Arts, London (2005). His work was included in the Harald Szeemann-curated exhibitions Weiss auf Weiss (1966); Bern Kunsthalle (1969); and in DOCUMENTA 5, Kassel (1972).

Important group exhibitions featuring the artist’s work include How Art Became Active: 1960 to Now at Tate Modern (2016); Other Primary Structures at The Jewish Museum, New York (2014); Art Turning Left: How Values Changed Making 1789–2013, Tate Liverpool (2013–14); Thresholds, TRAF0, Szczecin (2013); When Attitudes Become Form: Bern 1969/Venice 2013, Fondazione Prada, Venice (2013); Une exposition parle e, Jeu de Paume, Paris, France (2013); Migrations, Tate Britain, London (2012); A la vie de libe re e, Une histoire de la performance sur la Coˆte d’Azur de 1951 a 2011, Villa Arson, Nice, France (2012).



David Medalla (1942)
Cloud Canyons, 1963–2014
©David Medalla
Courtesy of kurimanzutto



David Medalla (1942)
New York Footprints No. 1, 1989 –1991
Oil on canvas
76.8 x 66.2 cm.
©David Medalla
Courtesy of kurimanzutto

アジフ・ミアン | Asif Mian (生年非公開、アメリカ)

ジャージー・シティー、ニュージャージー州生まれ。現在はブルックリン、ニューヨークで活動。過去の展覧会として、「*RAF: Prosthetic Location*」クイーンズ美術館、ニューヨーク(2021)、「*Always, Already, Haunting, "disss-co," Haunt*」、ザ・キッチン、ニューヨーク(2019)、「*Open Call*」The Shed、ニューヨーク(2019)、「*Beyond Geographies: Contemporary Art and Muslim Experience*」BRIC、ブルックリン(2019)、「*QI 2018: Volumes - Queens Museum International Biennial*」、ニューヨーク(2018)がある。

Born in Jersey City, NJ. Lives and works in Brooklyn, NY.

Recent exhibitions include *RAF: Prosthetic Location* solo exhibit at Queens Museum, NY (2021); *Always, Already, Haunting, "disss-co," Haunt* curated by Whitney ISP fellows at The Kitchen; *Open Call* at The Shed; *Beyond Geographies: Contemporary Art and Muslim Experience* at BRIC, Brooklyn; and *Queens International: Volumes* at Queens Museum.



Fronting, 2015

Single-channel video, sound, 07:28 mins.

Performed by Asif Mian & James Canales



Sedated Snake, 2019

Single-channel video, sound, 08:50 mins.

Performed by Asif Mian & SV Randall

プレシャス・オコヨモン | Precious Okoyomon (1993年、イギリス)

1993年生まれ。現在はニューヨークにて活動。

オコヨモンは、ナイジェリア系アメリカの現代アーティストであると同時に詩人でもある。 LUMA Westbau、チューリッヒ (2018)、フランクフルト現代美術館、ドイツ (2020)、パフォーマンス・スペース・ニューヨーク (2021)、およびアスペン美術館、コロラド州 (2021) 等で個展を開催。また、パレ・ド・トーキョー、フランス、パリ (2021)、LUMA アルル、フランス (2021)、ステューブソンギャラリー、ヨハネスブルグ、南アフリカ (2021)、アスペン美術館、コロラド州 (2020)、LUMA Westbau、チューリッヒ、スイス (2019)、Institute of Contemporary Art、ロンドン (2019) などの機関でのグループ展に参加している。またサーペンタイン・ギャラリー、ロンドン (2019)、Institute of Contemporary Art、ロンドン (2019) ではコミッションによるパフォーマンスを実施している。

Nigerian-American poet and artist born in 1993. Lives and works in Brooklyn, New York.

They have had institutional solo exhibitions at the Aspen Art Museum, Colorado (2021); Performance Space New York (2021); the Museum Für Moderne Kunst, Frankfurt (2020); the LUMA Westbau, Zurich (2018). Group exhibitions were held at, the Palais De Tokyo, Paris, France (2021); LUMA Arles, France (2021); Stevenson Gallery, Johannesburg, South Africa (2021); Aspen Art Museum, Colorado (2020); LUMA Westbau Zurich, Switzerland (2019); Institute of Contemporary Arts, London (2019). Major performances have been commissioned by the Serpentine Galleries, London (2019) and the Institute of Contemporary Art, London (2019).



Precious Okoyomon "Earthseed," Exhibition view at the Museum Für Moderne Kunst, Frankfurt, 2020. Courtesy of the artist, the Museum Für Moderne Kunst, and Quinn Harrelson Gallery. Photos by Axel Schneider



Precious Okoyomon “FRAGMENTED BODY PERCEPTION AS HIGHER VIBRATION FREQUENCIES TO GOD” ,
Exhibition view at Performance Space New York, 2021. Courtesy of the artist, PSNY, and
Quinn Harrelson Gallery. Photos by Da Ping Luo

フリーダ・オルパボ | Frida Orupabo (1986年、ノルウェー)

1986年、サルプスボル、ノルウェー生まれ。現在はオスロにて活動。

個展には、Kunsthall Trondheim、トロンハイム(2021)、ハイス・マルセイユ、アムステルダム(2020)、Frankfurt am Mai、オスロ(2019)、Kunstnernes Hus、オスロ(2019)がある。また、ルイジアナ近代美術館、Humlebaek(2021)、ユダヤ博物館(ジョナサン・ホロウィッツがキュレーション)、ニューヨーク(2020)、ルートヴィヒ美術館、ドイツ(2020)、ジーゲン美術館、ドイツ(2020)、ダイヒトアハレン、ハンブルグ(2021)、ハッセルブラッド財団、ヨーテボリ(2021)、MUAC、メキシコシティ(2021)、ルドルフィヌム、プラハ(2021)、ムンクトリエンナーレ、オスロ(2022)、Hannah Ryggen トリエンナーレ、オスロ(2022)、FRAC Poitou-Charentes、リナゼ(2021)、MOMENTUM ビエンナーレ、モストクンスタッレマンハイム、ドイツ(2021)、ロイヤルアカデミーサマーエキシビション(アイザックジュリアンがキュレーション)、ロンドン(2020)、Pinakothek der Moderne、ミュンヘン(2020)などの機関でのグループ展に参加している。

Frida Orupabo was born 1986 in Sarpsborg, Norway, and lives and works in Oslo.

Solo exhibitions include Future Generation Art Prize, Kiev and Venice (2021 and 2022); Kunsthall Trondheim, Trondheim (2021); Huis Marseille, Amsterdam (2020); Portikus, Frankfurt am Main and Kunstnernes Hus, Oslo (both 2019). Her work has been presented in group exhibitions at Louisiana Museum of Modern Art, Humlebaek (2021); the Jewish Museum (curated by Jonathan Horowitz), New York (2020); Museum Ludwig Cologne, Germany (2020); Museum für Gegenwartskunst Siegen, Germany (2020); Deichtorhallen, Hamburg (2021); Hasselblad Foundation, Gothenburg (2021); MUAC, Mexico City (2021); Rudolfinum, Prague (2021); Munch Triennale, Oslo (2022); Hannah Ryggen Triennial, Oslo (2022); FRAC Poitou-Charentes, Linazay (2021); MOMENTUM biennale, Moss and Kunsthalle Mannheim, Germany (2021); Royal Academy Summer Exhibition (curated by Isaac Julien), London (2020); Pinakothek der Moderne, Munich (2020).



Frida Orupabo, Untitled, 2018.

Courtesy the artist and Galerie Nordenhake Stockholm/Berlin/Mexico City.

Photographer: Carl Henrik Tillberg.



Frida Orupabo, Untitled, 2020.

Courtesy the artist and Galerie Nordenhake Stockholm/Berlin/Mexico City. Photographer:

Carl Henrik Tillberg.

ヴァンディー・ラッタナ | Vandy Rattana (1980 年、カンボジア)

クメール・ルージュが直前まで勢力を持っていた 1980 年、カンボジアに生まれたヴァンディー・ラッタナはその影響を受けてプノンペンで育った。現在は台北にて活動。

近年の主な個展として、国立台北芸術大学、台湾（2020）、ギャラリー Chateau d' Eau、フランス（2018）、ボルドー現代美術館、フランス（2015）、アジア・ソサエティ博物館、アメリカ（2013）などが挙げられる。また、釜山ビエンナーレ、韓国（2020）、シンガポールビエンナーレ、シンガポール（2019）、フランクフルト・ゲットー美術館、ドイツ（2019）、山口情報芸術センター、日本（2019）、高雄市立美術館、台湾（2019）、ギャラリー Faux Mouvement、メッス、フランス（2017）、山本現代ギャラリー、東京（2017）、東京都現代美術館（2015）、横浜美術館（2013）、ドクメンタ 13、カッセル、ドイツ（2012）などの機関でのグループ展に参加している。

Born in Cambodia in the aftermath of the Khmer Rouge and having grown up in Phnom Penh. Currently lives and works in Taipei, Taiwan.

His major solo exhibitions include Taipei National University of the Arts, Taiwan (2020), Galerie Chateau d'Eau, Toulouse, France (2018), CAPC, Bordeaux, France (2015), Asia Society Museum, New York City, America (2013). His major group exhibitions include Busan Biennale, Busan, Korea (2020), Singapore Biennale (2019), Jewish Museum, Frankfurt, Germany (2019), Yamaguchi Center for Arts and Media, Yamaguchi, Japan (2019), Kaohsiung Museum of Fine Arts (KMFA), Taiwan (2019), Galerie Faux Mouvement, Metz, France (2017), Mori Art Museum, Tokyo, Japan (2017), Museum of contemporary art, Tokyo, Japan (2015), Yokohama Museum of Art, Japan. (2013), dOCUMENTA 13, Kassel, Germany (2012).



MONOLOGUE

Co-Production: Jeu de Paume, Paris and
CAPC musée d'art contemporain de Bordeaux
© Vandy Rattana



Funeral

© Vandy Rattana

バルバラ・サンチェス・カネ | Barbara Sanchez Kane (1987年、メキシコ)

1987年、メリダ、メキシコ生まれ。現在もメリダで活動。

「De por Vida」カンパニーギャラリー、ニューヨーク (2021)、「En llamas」エル・ジャノ、メキシコシティ (2021)、「Otrxs Mundxs」ルフィーノ・タマヨ博物館、メキシコシティ (2020)、「セニョーラ」マイヤーカイナーギャラリー、オーストリア (2020)、「City Prince / sses」パレ・ド・

トーキョー、Paris (2019) などのグループ展に参加している。

Born in 1987, Me·rida, Mexico, where she lives and works.

Among her most recent group exhibitions are *De por Vida*, Company Gallery, New York (2021); *En llamas*, Llano, Mexico City, (2021); *Otrxs Mundxs*, Museo Tamayo, Mexico City (2020); *Sen·ora*, Meyer Kainer Galerie, Austria (2020); and *City Prince/ sses*, Palais de Tokyo, Paris (2019).

笹本晃 | Aki Sasamoto (1980 年、日本)

1980 年、神奈川県生まれ。現在はニューヨークを拠点に活動。

主な個展に、ボルトラミ・ギャラリー、ニューヨーク、アメリカ (2020、2019)、ホワイトレインボー、ロンドン、イギリス (2019)、Take Ninagawa、東京 (2018)、メンデス・ウッド DM、サンパウロ、ブラジル (2017)、スカルプチュア・センター、ニューヨーク、アメリカ (2016) などが挙げられる。また、UCCA Edge、上海、中国 (2021)、弘前れんが倉庫美術館 (2021、2020)、金沢 21 世紀美術館、金沢 (2018)、国立国際美術館、大阪 (2018)、レイキャベク美術館、アイスランド (2017)、東京都写真美術館、東京 (2017)、京都国際現代芸術祭、京都 (2015)、森美術館、東京 (2013)、ホイットニー美術館、ホイットニー、アメリカ (2010)、MoMA PS1、ニューヨーク、アメリカ (2010) などの機関でのグループ展に参加している。

Born in 1980, Kanagawa, Japan. Lives and works in New York, USA.

Her major solo exhibitions include Bortolami Gallery, New York, USA (2020, 2019), White Rainbow, London, UK (2019), Take Ninagawa, Tokyo, Japan (2017), Mendes Wood DM, São Paulo, Brazil (2017), Sculpture Center, New York, USA (2016). Group exhibitions include UCCA Edge, Shanghai (2021), Hirosaki Museum of Contemporary Art, Aomori, Japan (2021, 2021), The National Museum of Art, Osaka (2018), Reykjavik Art Museum, Reykjavik, Iceland (2017), Tokyo Photographic Art Museum, Tokyo (2017), Kyoto International Festival of Contemporary Culture (2015), Mori Art Museum, Tokyo (2013), Whitney Museum of American Art, New York (2010), MoMA PS1, New York (2010).



© Aki Sasamoto

Courtesy of Take Ninagawa, Tokyo

Photo by Naoya Hatakeyama

Collection of Hirosaki Museum of Contemporary Art

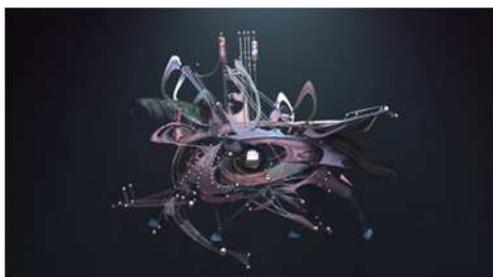
ジャコルビー・サッターホワイト | Jacolby Satterwhite (1986年、アメリカ)

1986年、サウスカロライナ州コロンビア生まれ。現在はニューヨークにて活動。

サッターホワイトの作品は、国際的に数多くの展覧会やフェスティバルで発表されており、近年の主な展覧会としては、ミュンヘンのハウスデアクンスト (2021)、光州ビエンナーレ、光州 (2021)、ウェクスナー芸術センター、オハイオ州コロンバス (2021)、ファブリックワークショップ&ミュージアム、フィラデルフィア (2019)、パイオニアワークス、ニューヨーク (2019)、ホワイトチャペルギャラリー、ロンドン (2019)、ニューヨーク近代美術館 (2019)、ミネアポリス美術館 (2019)、シカゴ現代美術館 (2018)、フォンダシオンルイヴィトン、パリ (2018)、ニューヨークのニューミュージアム (2017)、パブリックアート基金、ニューヨーク (2017)、サンフランシスコ美術館、サンフランシスコ (2017) インスティテュートオブコンテンポラリーアート、フィラデルフィア (2017) などが挙げられる。

Born in 1986, Columbia, South Carolina. Lives and works in New York.

Satterwhite's work has been presented in numerous exhibitions and festivals internationally, including most recently at Haus der Kunst, Munich (2021); Gwangju Biennale, Gwangju (2021); Wexner Center for the Arts, Columbus, OH (2021); Fabric Workshop & Museum, Philadelphia (2019); Pioneer Works, New York (2019); Whitechapel Gallery, London (2019); Museum of Modern Art, New York (2019); Minneapolis Institute of Art (2019); Museum of Contemporary Art, Chicago (2018); Fondation Louis Vuitton, Paris (2018); New Museum, New York (2017); Public Art Fund, New York (2017); San Francisco Museum of Art, San Francisco (2017); and Institute of Contemporary Art, Philadelphia (2017).



Jacolby Satterwhite

still from Birds in Paradise

2019

2-channel HD color video and 3D animation with sound

RT: 18:30 min.

© Jacolby Satterwhite

Courtesy of the artist and Mitchell-Innes & Nash, New York

曾根裕 | Yutaka Sone (1965 年、日本)

1965 年、静岡生まれ。現在は中国、メキシコ、ベルギー、日本にて活動。

近年の主な個展に四方当代美術館、南京（2017）、David Zwirner、ニューヨーク（2016）、サンタ・モニカ美術館、ロサンゼルス（2013）、東京オペラシティ アートギャラリー、東京、（2011）、メゾン・エルメス・フォーラム、東京（2011）、Kunsthalle Bern、ベルン、スイス（2006）、豊田市美術館、愛知（2002）などが挙げられる。また、豊田市美術館、名古屋（2020）、金沢 21 世紀美術館、金沢（2019）、東京藝術大学大学美術館 陳列館、東京（2019）、プラダ財団、ミラノ（2018）、Salon Dahlmann、ベルリン、ドイツ（2018）、四方当代美術館、南京（2013）などの機関でのグループ展に参加している。

Born in 1965, Shizuoka, Japan.

Solo exhibitions include, Sifang Art Museum, Nanjing, China (2017); David Zwirner, New York (2016); Santa Monica Museum of Art, Los Angeles (2013); Tokyo Opera City Art Gallery, Tokyo (2011); Maison Hermès Le Forum, Tokyo (2010); Kunsthalle Bern, Switzerland (2006); Toyota Municipal Museum of Art, Toyota, Japan (2002). Sone's work has also been exhibited in group exhibitions such as, Toyota Municipal Museum of Art, Nagoya, Japan (2020); Kanazawa 21st Century Museum, Kanazawa, Japan (2019); Chinretsukan, Tokyo University of the Arts, Japan (2019); Fondazione Prada, Milan, Italy (2018); Salon Dahlmann, Berlin, Germany (2018); Sifang Art Museum, Nanjing, China (2013).

アピチャップン・ウィーラセタクン | Apichatpong Weerasethakul (1970 年、タイ)

コンケン北東部に生まれ、現在はタイのチェンマイに在住。

過去の展覧会としては、ドクメンタ 13、カッセル、ドイツ (2012)、テートモダン、ロンドン (2016) などに参加。また、2016 年にオランダの Prince Claus Awards を受賞し、2019 年には英国最大の国際現代美術賞であるアルテスマンディ賞を受賞した。進行中のプロジェクトには、解離された意識についての投影パフォーマンスである「フィーバールーム」があり、Kunstenfestivaldesarts、ブリュッセル (2016)、Festival d' Automne、パリ (2016)、Volksbühne、ベルリン (2017)、Wiener Festwochen、ウィーン (2019) などで発表された。

Born in Khon Kaen, north-eastern. Lives in Chiang Mai, Thailand.

In 2012, he is invited to participate in Documenta (13), one of the most well-known art exhibitions in Kassel, Germany. In 2016, a retrospective of his films was presented at Tate Modern, London (2016). He was the Principal Laureate of the 2016 Prince Claus Awards, the Netherlands. In 2019, Apichatpong was awarded the Artes Mundi prize, the UK's largest prize for international contemporary art. His on-going project includes Fever Room, a projection performance about displaced consciousness. It has been presented at Kunstenfestivaldesarts, Brussels (2016); Festival d' Automne, Paris (2016); Volksbühne, Berlin (2017); Wiener Festwochen, Vienna (2019), among others.



© Apichatpong Weerasethakul



© Apichatpong Weerasethakul

梁慧圭 / ヤン・ヘギユ | Haegue Yang (1971 年、韓国)

1971 年、韓国ソウル生まれ。現在はベルリンとソウルにて制作活動中。

ヤンは、主要な国際展示会に数多く参加しており、その中には第 16 回イスタンブール・ビエンナーレ (2019)、第 21 回ビエンナーレ、シドニー (2018)、ラ・ビエンナーレ・デ・モントリオール (2016)、第 12 回シャルジャ・ビエンナーレ (2015)、第 9 回台北ビエンナーレ (2014)、ドクメンタ XIII、カッセル (2012)、そして第 53 回ヴェネツィア・ビエンナーレ (2009) がある。主な近年の個展としては、テート・セント・アイブス (2020)、マニラ現代美術館 (2020)、オンタリオ美術館、トロント (2020)、国立近代現代美術館、ソウル (2020)、バス美術館、マイアミ (2019)、近代美術館、ニューヨーク (2019)、サウス・ロンドン・ギャラリー (2019)、MO. CO.、パナセ、モンペリエ (2018)、およびルートヴィヒ美術館、ケルン (2018) などが挙げられる。

Born in 1971 in Seoul, South Korea. Currently lives and works in Berlin and Seoul.

Yang has participated in major international exhibitions including the 16th Istanbul Biennial (2019); the 21st Biennale of Sydney (2018); La Biennale de Montréal (2016); the 12th Sharjah Biennial (2015); the 9th Taipei Biennial (2014); Documenta XIII in Kassel (2012); and the 53rd Venice Biennale (2009). Selected recent solo exhibitions have been held at Tate St Ives (2020), Museum of Contemporary Art and Design, Manila (2020), Art Gallery of Ontario, Toronto (2020), National Museum of Modern and Contemporary Art, Seoul (2020), The Bass Museum of Art, Miami (2019); Museum of Modern Art, New York (2019); South London Gallery (2019); MO. CO. Panacée, Montpellier (2018), and Museum Ludwig, Cologne (2018).



Haegue Yang

Red Broken Mountainous Labyrinth

2008

Aluminum venetian blinds, powder-coated aluminum hanging structure, steel wire rope, moving spotlights, DMX controller, spotlights

Dimensions variable

Courtesy of the artist and Greene Naftali, New York

Installation of *In the Cone of Uncertainty*, The Bass Museum of Art, Miami Beach, USA, 2019

Photo: Zachary Balber

(4) 会場

岡山芸術交流 2022 のテーマを体現する現代アート作品の制作及び展示を行う。屋外展示となるものを除き、原則有料鑑賞とする。

現代アート作品展示会場



旧内山下小学校



岡山県天神山文化プラザ



岡山市立オリエント美術館



林原美術館



シネマ・クレール丸の内



岡山城



旧内山下小学校

旧内山下小学校は、1887年5月、市内小橋町の国清寺内に創立され、1890年8月に岡山城西の丸跡地に移転し、2001年3月の閉校まで同地にあった。現在残る校舎は1933年、1934年に南棟が竣工し、その後1937年に東棟、北棟と渡り廊下が増設され、全館が竣工した。

市内最古の鉄筋コンクリート造建築の校舎で、比較的簡素な造形の中に当時流行りの様式の反映も見られ、文化財的視点から見ても貴重な建築物である。



岡山県天神山文化プラザ

図書館を核とした「岡山県総合文化センター」として、1962年6月に開館した。建物の設計は、モダニズム建築の巨匠・前川國男によるもので、屋上庭園、ピロティ、吹き抜けレリーフなど、当時のモダンなデザイン手法が随所に見られる。図書館部門が移転した後、2005年に、岡山県民の身近な芸術文化活動と文化情報発信の拠点施設としてリニューアルオープンした。



岡山市立オリエント美術館

学校法人岡山学園(当時の理事長：故安原真二郎氏)より、古代オリエントの考古美術品 1,947 点を寄贈された事を機に、1979 年に開館した国内唯一のオリエント専門の公立美術館。古代オリエント研究者として著名な三笠宮崇仁親王殿下(1915-2016 年)には特別顧問として様々な指導・助言をいただきながら収蔵品の充実につとめ、現在の収蔵品は約 4,700 点を数える(2018 年 3 月現在)。建物は岡田新一氏の設計で高い評価を得ている。2004 年、開館 25 周年記念事業の一環として取得したアッシリア・レリーフ「有翼鷲頭精霊像浮彫」は、写実的表現で知られる古代アッシリア芸術の頂点をなすものである。



林原美術館

かつての岡山城二の丸郭の一角に位置し、1964 年、故林原一郎氏が蒐集していた古美術品をもとに開館した。国宝を含む国内屈指の刀剣コレクションのほか、岡山藩主池田家の伝来品や、現存を確認された国内唯一の平家物語絵巻の完本を収蔵していることでも知られており、ミシュラン・グリーンガイドで、星を得ている。設計は前川國男氏で、正門となっている長屋門は、岡山藩主池田家の分家・生坂藩池田家屋敷門を移築したものである。



シネマ・クレール丸の内

2001年に完成したシネマ・クレール丸の内は、世界の名作フィルムやアニメーション映画を多く提供している岡山唯一のミニシアター。コンクリート打ちっぱなしの独特な外観が、岡山市の歴史文化ゾーンにおいて存在感を際立たせている。



岡山城

豊臣五大老のひとりで、備前美作 57 万石の太守・宇喜多秀家の居城として築かれ、かつては 5 重の堀を擁する巨大な城郭であった。中心となる天守は、関ヶ原合戦前に築かれ、古い様式を伝える貴重な天守のひとつであったが、惜しくも戦災で焼失した。築城と同時に整備された城下町は岡山の都市的起源であり、現在でもその痕跡を各所にとどめている。

4 パブリックプログラム

(1) 方針

岡山芸術交流が地域に開かれ、浸透し、持続・発展していくため、市民・県民が展覧会へ来場するきっかけづくりや、展覧会により親しんでもらうための各種プログラムを実施する。

また、次代を担う子どもへの鑑賞支援やサポートスタッフの育成など、岡山の未来づくり・人づくりのための取組を継続して実施していく。

(2) 目的

岡山芸術交流の基盤整備と持続可能な開発のためのプロジェクトとして、3つのポテンシャルに関する発掘や連携を行っていく。

① 人のポテンシャル

- ・地域で活躍する人々と将来を担う人材を発掘
- ・アートと産業の先鋭者等と連携

② 場のポテンシャル

- ・文化拠点、オルタナティブスペース等と連携
- ・新たな出来事が誘発する場の発掘

③ 文化資産のポテンシャル

- ・芸術文化に関わる既存の施設等と連携

(3) 取組概要

① 岡山芸術交流の基盤整備に関するシンボルイベント

芸術祭の基盤整備と持続可能な開発のシンボルイベント的事業として、岡山の文化資源や瀬戸内アートリージョンなどをテーマに、関連する登壇者を迎え、実施する場所のポテンシャルなども考慮したシンポジウムやツアー企画を行う。

② 本展テーマ・アーティスト・作品の拡張プログラム

本展テーマや作品を、より多種多様な世代や層へ届けるための波及・派生的展開として、テーマを拡張させるトークシリーズや、表町商店街の空き店舗を活用したジャーナルプログラムのほか、参加アーティストのインタビュー動画の撮影・公開などを展開する。

③ 岡山カルチャーシーン・クローズアップ企画

岡山市内の回遊性と都市の魅力発見を促すカルチャーシーンに着目し、2016年に制作発行した「オルタナティブマップ」を活用した街歩きなどを展開する。岡山芸術交流 2022 においては特に旭川河畔にスポットを当てた内容で展開する。

④ 鑑賞支援

アートファンのみならず幅広い層の方々にアートの楽しみ方を知ってもらい、作品に対す

る理解を深めてもらうため、対話型鑑賞を用いた鑑賞ツアーや鑑賞会を実施する。また本展開催時に来場者への鑑賞支援の役割を担う「鑑賞ナビゲーター（仮称）」を計画的に育成し、来場者へのサポートを行う。

⑤ 地域への浸透（地元巻き込み・参画を含む）

事業の周知・浸透を図り、本展への関心・期待感を引き出すことを目的に市内公民館や地元団体等で継続的に出前講座を展開する。また、岡山芸術交流に関わる新たな担い手・パートナーの発掘を目的として、公募事業の募集・実施を行うなど、地元地域の巻き込み・参画を推進していく。

⑥ 子どもへの鑑賞支援（学校鑑賞含む）

コンセプトのひとつ「人を育む」の観点に立ち、次代を担う子どもたちが日ごろからアートに触れる機会を増やしていくとともに、岡山芸術交流が子どもたちの創造力や感受性を豊かにする一助となることを目的として各種の鑑賞支援のための取組を展開する。

⑦ 人材の育成

岡山芸術交流を支えるサポートスタッフを広く募集するとともに、会場運営に限定していた活動範囲をイベント補助等にも拡大し、活動の場を広げていく。また、過去の岡山芸術交流で活躍したサポートスタッフについては、活動のキーマンとして早い段階から育成を図る。

⑧ 共催イベント

岡山芸術交流をともに盛り上げるパートナーづくりと、相互の発展・連携を目的として、共催イベントを実施し、事業の周知・浸透と気運の醸成を図る。

※想定されるパートナー・連携機関 小学校・中学校・特別支援学校・高等学校・大学

地元文化芸術団体・NPO等

※今回対象となる主なエリア

旭川河畔・表町

(4) スケジュール

・パブリックプログラム全体

2021年		2022年										会期：9月30日(金)～11月27日(日)		
11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月		
調査														
実施準備														
		パブリックプログラム実施												

・子どもたちへの鑑賞支援
(学校連携など)

2021年		2022年										会期：9月30日(金)～11月27日(日)		
11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月		
アウトリーチ案内														
		学校鑑賞案内通知申請				決定通知							学校鑑賞	
		案内												

5 広報

(1) 方針

国内を中心に広範囲への情報発信を行い、国際現代美術展としての「岡山芸術交流」の浸透・確立を目指すとともに、来場促進及び多様な主体の参画に結び付けていくことを目的とする。

(2) 取組概要

岡山芸術交流 2022 への来場、各種プログラムやサポートスタッフへの参加・参画促進、開催機運の醸成を図るため、各ターゲットに適した広報計画を立て、効果的な情報発信を行う。

① 県民・市民向け広報

行政・教育機関・報道機関・交通機関・町内等様々なルートを通じた広範囲な情報発信を行い、本事業への理解促進や来場促進を図る。

② 国内向け広報

近県・都市部での報道獲得や観光を入口とした情報発信を行うため、メディア各社や観光事業者と連携し、本展の周知を図る。

③ 海外向け広報

欧米やアジアを中心に情報発信を行うことで、注目度・期待感を高め、本展の認知度向上を図る。

(3) 広報ツール

① 制作物

時期に合わせて情報を盛り込み、チラシやポスター等を作成する。市内各所だけでなく、全国の文化施設や美術系の学校等へも送付することで、開催情報の周知を図る。

② 公式ウェブサイト・各種 SNS

開催概要やアーティスト情報、各種イベント情報を掲載。情報の充実を図ることで、本展の魅力を伝え、過去来場者の期待感醸成によるリピーター化と新たなファン層の拡大を目指す。

(4) スケジュール

2021年		2022年										会期：9月30日(金)～11月27日(日)			
11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月			
メディア各社や観光事業者へのPR活動															
公式Webサイト・SNSによる情報発信								本サイト公開							
								チラシ・ポスター配布							
メディア向けに情報発信								記者会見							

6 来場者対応

(1) 方針

会場が複数施設に設定されているが、各施設間が数百メートルの徒歩圏内に距離で点在し、会場に隣接して観光施設・文化施設が数多く立地しており、これらの施設も併せて楽しむことが岡山芸術交流の重要なコンセプトのひとつであり、魅力でもあることから、来場者が効率よく、かつ、スムーズに鑑賞ができるようにすることが重要である。

(2) 取組概要

① 会場運営

各会場にスタッフを配置し、来場者への案内や鑑賞券の販売、確認等を行う。

② 来場者への情報提供

・会場、周辺施設、二次交通

会場、作品、トイレ、バリアフリーなど情報提供するとともに、イベントや近隣の観光情報等の案内を行い、快適に鑑賞ができるようにする。

また、来場者が効率よく鑑賞できるよう、バスや路面電車、コミュニティサイクル「ももちやり」など公共交通機関の情報を提供する。

・巡回コース

効率よく会場を回るため、県外からの来場者を対象とした半日、1日コースなど、テーマや種別に応じたおすすめ鑑賞コース等のモデルコースを作成し、ウェブサイトや会場にて案内する。

・多言語対応

海外からの来場者へも対応するため、多言語対応、インターネット無料接続サービスの提供について取り組む。

③ バリアフリー対応

各会場においては、バリアフリーに配慮するとともに選任スタッフを配置する等、あらゆる来場者にやさしい会場づくりを行う。

④ 新型コロナウイルス感染防止対策

(内容は、10 新型コロナウイルス感染防止対策の項参照)

(3) スケジュール

2021年		2022年										会期：9月30日(金)～11月27日(日)	
11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
会場運営計画策定											会場運営		
		関係者機関との調整											
												広報制作物設置	

7 サポートスタッフ

(1) 方針

岡山芸術交流 2022 会期中の運営サポートをはじめ、来場者の方々に作品鑑賞とともに岡山の街を楽しんでいただくための「街のコンシェルジュ」となり、ともに岡山芸術交流を盛り上げていく人材育成に取り組む。

(2) 取組概要

① サポートスタッフの活動内容

会期中の受付、作品看視・案内等、各会場での来場者対応を行い、来場者がスムーズに鑑賞できるようサポートする。また、開催記録のための撮影や、学校との連携により来場する児童生徒等への対話型鑑賞の実施、各種イベントの参画、補助など多様な活動の場を設ける。

② サポートスタッフ募集方法

ウェブサイトや SNS で広く募集を行うとともに、県内企業や大学・専門学校、高等学校へ訪問し、多くの学生へ積極的な参加を働きかける。

募集にあたっては、参加メリットや活動時間の見直しを行うなど、応募しやすい内容の検討を行う。

③ 育成・研修内容

継続的に開催を支えていくための人材育成カリキュラムを編成する。研修については、これまでの岡山芸術交流の開催内容を理解するための講座や街のコンシェルジュとなるための岡山の歴史・観光・食などに関する講座、接客力向上を目的としたアクティブリスニング講座、対話による鑑賞法を学ぶための鑑賞支援ナビゲーター養成講座等、様々な内容で行う。

研修の実施にあたっては、eラーニングによるオンラインでの実施とし、コロナ禍での、サポートスタッフの育成に取り組む。また、街のコンシェルジュとしての意識向上につなげるため、近隣の飲食店等で活用できるオンラインクーポンの導入を検討する。

(3) スケジュール

2021年		2022年										
11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
	サポートスタッフ募集											
		サポートスタッフ育成研修										
											会場運営サポート	

8 連携・協賛

(1) 方針

岡山芸術交流 2022 の開催を通じて、地域の文化芸術団体や企業、教育機関等との連携・協力を進めていくことにより、開催の効果を会場周辺エリアのみならず、幅広く波及させることにより地域全体の盛り上げを図る。

(2) 連携

岡山芸術交流を地域に浸透させ持続可能なものとするため、地域との連携に強化して取り組んでいくほか、岡山芸術交流 2022 と同時期に開催される芸術交流と親和性の高いイベント、あるいは県内で開催される文化・芸術イベントと連携・協力を図ることで相乗効果を生み、互いのイベントや地域の盛り上げにつなげる。

① 地域との連携

地域の文化芸術団体や NPO 団体等と連携しながら、鑑賞支援プログラムや鑑賞・広報コンテンツの制作、イベント企画等の取組を行うことにより、地域の中で岡山芸術交流を様々な角度から支える人材・団体を育成する仕組みづくりを図る。

また、地元住民への周知や事業への参加・参画を促進するため、教育機関や地域団体、企業等を対象に、現代アートの楽しみ方や岡山芸術交流の概要説明等を含めた出張説明会を積極的に実施し、岡山芸術交流に興味・関心をもってもらうことにより、新たなファン層の拡大を目指す。

② 広域連携

岡山芸術交流 2022 と同時期に開催される現代美術の国際展等と相互の情報発信を行うなど、主に広報面での連携を図る。

また、近隣市町村で行われる岡山芸術交流と親和性の高いイベントや多数の集客が見込めるイベント等と連携を図ることにより、より効果の高い情報発信効果を目指す。

このほか、岡山県内の美術館をはじめとする文化施設等と連携し、市民・県民を対象にしたプログラム等を実施することで、事業効果の広域的な波及を図る。

(3) 協力・協賛

岡山芸術交流の開催趣旨に賛同する地元企業等に対し、チケット協賛や協賛金額に応じた特典を設け、様々な形での協力・協賛や寄付を働きかけ、パートナーシップを築いていくことにより、岡山芸術交流の地域への浸透を図る。

(4) スケジュール

2021年		2022年										会期：9月30日(金)～11月27日(日)	
11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
地域の文化芸術団体やNPO団体等との連携													
地域へのアウトリーチ、説明会													
他事業(現代美術の国際展等)との連携													
県内市町村との連携													

9 鑑賞券、オフィシャルグッズ

(1) 方針

来場者が、会場間を回遊できるような利便性の高い鑑賞券制度を検討する。また、岡山芸術交流 2022 の鑑賞記念となるようなオフィシャルグッズを開発・販売する。

(2) 取組概要

① 鑑賞券

次のとおり鑑賞券の価格を設定し、電子鑑賞券販売業者、県内プレイガイド、旅行代理店等を通じ効果的な鑑賞券販売促進を行う。特に、県内の盛り上がりを図るため県内の鑑賞券販売促進に努める。また、会期中は、上記に加え有料会場においても鑑賞券を販売する。

「前売券」は「引換券」であり、会期中に会場等で当日券に引き換えるものとし、前売券販売時期は、詳細企画発表後を予定。

区分	一般	一般 (県民)	学生	高校生以下	65歳以上	団体	単館
前売券	1,000円			—	—	—	—
当日券	1,800円	1,500円	1,000円	無料	1,300円	1,300円	500円

※障がい者、介助者1名は無料

※学生とは、大学生、専門学生

※団体は、8名以上

※単館とは、1会場のみ鑑賞可

② オフィシャルグッズ

岡山芸術交流のロゴマーク、メインビジュアル等を用いたグッズの開発、販売管理方法等は引き続き検討する。

(3) スケジュール

2021年		2022年										会期：9月30日(金)～11月27日(日)		
11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月		
	チケットセンター開設準備													
鑑賞券詳細発表					チケットセンター開設									
							引換券販売						鑑賞券販売	
オフィシャルグッズ販売管理方法検討								製造					オフィシャルグッズ販売	

11 全体スケジュール

項目	2021年		2022年									会期：9月30日(金)～11月27日(日)			
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月		
計画	● 実施計画発表											● 詳細企画発表			
作品制作	アーティスト選定及び調整		会場調査・作品配置調整				作品及び作品配置発表 制作準備				作品制作	運営			
パブリックプログラム全体	調査 実施準備		パブリックプログラム実施												
子どもへの鑑賞支援(学校連携など)	アウトリーチ案内		学校鑑賞案内通知申請		決定通知案内									学校鑑賞	
広報	メディア各社や観光事業者へのPR活動 公式Webサイト・SNSによる情報発信							本サイト公開 チラシ・ポスター配布		メディア向けに情報発信				記者会見	
来場者対応	会場運営計画策定				関係者機関との調整									会場運営	
サポートスタッフ	サポートスタッフ募集		サポートスタッフ育成研修									広報制作物設置	会場運営サポート		
連携・協賛	地域の文化芸術団体やNPO団体等との連携 地域へのアウトリーチ、説明会 他事業(現代美術の国際展等)との連携 県内市町村との連携														
鑑賞券・オフィシャルグッズ	鑑賞券詳細発表		チケットセンター開設準備				チケットセンター開設				引換券販売			製造	鑑賞券販売 オフィシャルグッズ販売
新型コロナウイルス感染防止対策	会場運営計画策定		感染防止対策検討									準備	感染防止対策		

本計画についてのお問い合わせ

岡山芸術交流実行委員会事務局

〒700-0823 岡山市北区丸の内二丁目1番1号

TEL:086-221-0033 | FAX:086-221-0031 | E-MAIL:info@okayamaartsummit.jp

WEB:www.okayamaartsummit.jp